

17世紀以降のサファヴィー朝・ムガル朝
関係における両君主の擬制的な親族関係
——カンダハールの係争をめぐる
外交書簡の分析を通じて——

徳 永 佳 晃

はじめに

イラン高原を支配するサファヴィー朝（1501年-1722年）とインド亜大陸を拠点とするムガル朝（1526年-1858年）は、長年にわたって相互を重視し友好的、平和的な関係を構築していたと言われる^①。このような両朝関係を象徴する事例の一つは、サファヴィー朝第5代君主アッバース1世（在位1587年-1629年）とムガル朝第4代君主ジャハーンギール（在位1605年-1627年）が、外交書簡で互いを兄弟と呼び合っていたことである。さらに本稿で述べるように、両君主が没した後も両朝の君主は、相手を自らの親族に喩えて書簡を送っていた。実際には両王家の間に血縁関係はないため、これらの呼称はあくまで擬制的なものである。このような双方の君主を親族に喩える習慣について、先行研究では両朝が友好関係にあった証拠として言及されるにとどまり（Islam 1970, 68, 206-207; 羽田1995, 82）、それ以上詳しく考察されていない。両朝君主が外交上のやりとりを重ねる中で、なぜこの習慣は世代を超えて続けられたのであろうか。この疑問を明らかにするためには、両朝君主を親族に喩える表現がどのような文脈で、かついかなる意図を持って用いられてきたか、これらの表現を用いた書簡が送られた政治的な背景と合わせて、詳細に検討する必要があるであろう。

以上を念頭に本稿では、17世紀におけるサファヴィー朝とムガル朝との外交書簡における、両朝の君主を親族に喩える表現を分析する。そのなかでも特に、カンダハールをめぐる係争に関する外交書

簡に着目した。両朝の境界地域に位置するカンダハールは、イラン高原、中央アジアとインド亜大陸をつなぐ陸上交通路の要衝であった。そのため両朝は同地をめぐり長年衝突を繰り返し、両朝関係における最大の懸案となっていた (Islam 1970, 176-177)。本稿では、カンダハールをめぐる係争において、両朝が互いを親族に喩えつつ自らの主張を展開することで、外交関係の破綻を防いでいたことを示す。この議論を通して、外交書簡に見られる両朝君主の擬制的な親族関係は、単なる友好関係の表明ではなく、両朝が全面的な衝突を避けながらも自らの利益確保を正当化するための大義名分として用いられてきたことが明らかとなるであろう。本稿では、両朝君主の間で交わされた書簡の文面を中心に分析する⁽²⁾。これらの原本は現存しないため、それらが実際に起草、発信されたか確かめる必要がある。そのため本稿では可能な限り、書簡の発信に至る史実を確認した後、書簡集や年代記などいくつかの種類の史料を対照させて、書簡の文面を検討した。またこれらの外交書簡に加えて、両朝の年代記やヨーロッパ諸語の旅行記も合わせて参照した。

1. 外交書簡における両朝君主の擬制的な親族関係の登場とその表現

本稿の具体的な議論に入る前に、そもそも外交書簡において両朝君主を親族に喩える表現がどのような状況で使用され始めたか、加えて具体的にどのような表現が用いられてきたか確認しよう。まず前者を明らかにするために、アッバース1世とジャハーンギールの治世までの両朝関係を概観する。両朝の初めての接触は、ムガル朝初代君主となるバーブル (在位1526年-1530年) とサファヴィー朝初代君主イスマーイール1世 (在位1501年-1524年) の時代であった。バーブルはインドへ進出する以前の1511年に、イスマーイール1世から援軍を得て、シャイバーン朝からサマルカンドを一時奪取した (Mohibbul Hasan 1985, 40-43; Islam 1970, 5-12)。さらにムガル朝第2代君主フマーユーン (在位1530年-1540年, 1555年-1556年) は、スール朝に破れたことで一時インド亜大陸を追われ、1543-44年から1545年まで

サファヴィー朝第2代君主タフマースプ1世(在位1524年-1576年)のもとへと身を寄せた。フマーユーンはこの亡命によってサファヴィー朝から援助を取り付け、その軍事力を用いつつカンダハールを奪取した。同地には当初、サファヴィー朝から統治者が派遣されたものの、すぐにフマーユーンはその支配権を手中に収めた。そしてカンダハールを拠点に、フマーユーンは自らの旧領全体を回復することに成功した(Ray 1948; Islam 1970, 24-47)。以上に挙げたバーブル及びフマーユーンの事例は、ムガル朝が当初、サファヴィー朝から軍事的な援助を受ける立場にあったことを示している。

上述したバーブルとフマーユーンは、それぞれサファヴィー朝の援助を受けた際に、ハイダルの冠(tāj-i Haydarī)を被ったとされる。この冠の着用は、サファヴィー教団の信奉者、すなわち同朝君主の弟子であることを意味している(Moin 2012, 84-88, 125-127; Islam 1970, 7-8, 28-31)。またカンダハールではタフマースプ1世とフマーユーンによる連名の硬貨が発行されたが、その硬貨に刻まれた両君主の称号を比べると、前者が後者に対し優位に立っていたことが分かる(Lowick 1982, 76; Aman Ur Rahman 1988)。これらのことから、当時のムガル朝君主はサファヴィー朝君主に対して、実際の力関係だけでなく名目的な関係性においても劣位に甘んじていたと言えよう⁽³⁾。

しかしながらサファヴィー朝は、1576年にタフマースプ1世が死去すると、内紛やそれに乗じた周辺王朝の攻撃により存亡の危機に陥った(Newman 2006, 41-52; 後藤 2004)。その一方ムガル朝では、第3代君主アクバル(在位1556年-1605年)によって政治改革が進められ、盤石な支配体制が構築された(Streusand 1989, 108-153; Richards 1993, 58-78)。このようにしてムガル朝は、16世紀末までにはサファヴィー朝から援助を受ける立場を脱したと言える⁽⁴⁾。

この時期に即位したのが、アッバース1世とジャハーンギールであった。両君主は、書簡と贈り物を頻繁に交換しあい関係を深めていた。さらにジャハーンギールの画集には、彼が見た夢として両者が抱き合う情景や、ジャハーンギールとアッバース1世が談笑する情景が描かれた絵画が収録されている(Verma 2009, 131-132; 羽田 1995,

76-77, 82)。これらの事例は、両者の親しい交友関係を裏付けるものと言えよう。このような関係のもとで書簡に登場したのが、両朝君主を親族に喩える表現であった。1603年にアッバース1世からジャハーンギールに宛てられた書簡は、両者が交わした書簡のなかで、送受の時期が推定できる最も古いものである (Islam 1979-1982, 1: 144-145)。そしてその書簡において、アッバース1世は当時まだ皇太子であったジャハーンギールに対して兄弟 (barādar) と呼びかけた (Nuskha-yi Jāmi'a, 223v)⁽⁵⁾。ペルシア語書簡の伝統において、親しく文通する者同士が互いを自らの親族に喩えて呼びあうこと自体は、それほど珍しくない。従って両朝君主を親族に喩える表現は、アッバース1世とジャハーンギールの交友関係を前提として用いられ始めたと言える。

以上のような個人間の交友関係に加えて、当時の両朝関係を念頭に置いて、書簡に上記の表現を用いることは好ましいことであったと考えられる。なぜならばこの表現は、両君主の明確な上下関係を含意しておらず、以前のようなムガル朝君主がサファヴィー朝君主の臣下や弟子とする立場を否定するものであったからである。その意味で両朝君主の擬制的な親族関係は、上述した両朝間における力関係の変化、すなわちムガル朝のサファヴィー朝に対する劣位が克服された当時の状況に適っていた⁽⁶⁾。

興味深いことに、アッバース1世とジャハーンギールが死去して両朝君主の交友関係が一度清算された後も、両朝君主を親族に喩える表現は外交書簡から消えることはなかった。本稿末の表は、17世紀以降のカンダハールの係争をめぐる外交書簡に関して、それらの書簡における両朝君主の親族関係への言及をまとめたものである。これらは両朝歴代君主の間で交わされた外交書簡のごく一部に過ぎないものの、この表から少なくとも以下の点が指摘できるであろう⁽⁷⁾。すなわち両朝君主の関係性に関しては、兄弟 (barādar) もしくは兄弟の絆 ('aqd-i muvākhāt) という表現だけではなく、息子 (farzand) や父子関係 (ravābiṭ-i pidar-farzandī), さらにおじ ('amm) といった、世代や親等の違うものも用いられていたことである。このことから、

両朝君主の擬制的な親族関係は、その系譜が厳密に定められていなかったことが分かる⁽⁸⁾。しかしながら外交書簡において両朝君主を親族に喩える習慣自体は、双方の関係性について様々な表現が用いられながらも、アッバース1世とジャハーンギール以降の両朝君主に引き継がれた。なぜこの習慣は両君主の死後も存続したのであるうか。次章からはカンダハールをめぐる係争の分析を通じて、この疑問に迫ろう。

2. アッバース1世のカンダハール親征に伴う

外交書簡の交換

本章では、初めて外交書簡において双方の関係を親族に喩えたアッバース1世とジャハーンギールの治世を取り上げ、両君主がカンダハールに関してどのような主張を展開したか検討する。まずはその前提として、両君主の治世に当たる16世紀末から17世紀初めまでの両朝関係をめぐる状況を概説しよう。当時サファヴィー朝とムガル朝にとって懸案となっていたのは、以下で述べる中央アジアのシャイバーン朝やアシュタルハーン朝の活動であった。シャイバーン朝第10代君主アブドゥッラー2世（在位1583年-1598年）は、王族の内紛を抑え自らの支配を固めた後、対外遠征を行いサファヴィー朝からヘラートを奪取した（Haidar 2002, 257-281; Burton 1997, 46-60）。アブドゥッラー2世が1598年に死去すると、その混乱に乗じてサファヴィー朝君主アッバース1世はヘラートの奪還に成功する。これに対し、シャイバーン朝に代わって成立したアシュタルハーン朝は、第3代君主イマーム・クリー（在位1611年-1641年）のもとでサファヴィー朝への反撃に転じ、同朝の支配領域にたびたび侵入した（Burton 1997, 100-102, 142-147; Quinn 2015, 81-85）。一方ムガル朝は、アクバルのもとでシャイバーン朝と外交使節を派遣しあって、友好的な関係を維持していた。その一方で同朝は、シャイバーン朝の侵入に備えて、バダフシャーやカーブルといった北方辺境領域における防備を固めた。一方ジャハーンギールは、当初アシュタルハーン朝との関係維持にそれほど関心を払わなかった。しかしながら、後述する

ようにカンダハールをサファヴィー朝に奪取されると、その混乱に乗じてアシュタルハーン朝がムガル朝へ攻勢に出ることを恐れ、北方への警戒を強めたとされる (Islam 1970, 51-55, 86-91)。

以上のようにサファヴィー朝とムガル朝は、ともにシャイバーン朝やアシュタルハーン朝の脅威に晒されていた。そのため両朝は、互いとの連携を維持する必要があったと言える⁽⁹⁾。しかしながらそのことは、サファヴィー朝とムガル朝の間で紛争が生じなかったことを意味しない。その焦点となったのが、カンダハールである。アッバース1世は、政治・軍事面の改革によって、タフマースプ1世死後弱体化していたサファヴィー朝の支配体制を立て直すと、即位当初に近隣の王朝の攻撃によって失っていた領域の奪還に着手した。そしてその対象には、1595年にムガル朝によって奪われていたカンダハールも含まれていたとされる (羽田 2008, 364-368; Quinn 2015, 116-118)。

1622年、アッバース1世は自ら軍を率いて、当時ムガル朝が支配していたカンダハールに至った。この攻撃を予期していなかったムガル朝の対応は後手に回り、1ヶ月あまりの攻囲戦の後、同地は陥落した。目的を達成したアッバース1世は、これ以上ムガル朝を刺激することを避けるため、降伏したムガル朝の守備兵を丁重に扱い、速やかに同朝へと送還した (Afzal al-Tavārikh, 813-820; Ihyā' al-Mulūk, 441-446; Jahāngīr Nāma, 392-394)。この送還に合わせてジャハーンギールに送られた書簡には、カンダハールの攻撃に至った理由が説明されている。以下では文面に即してその内容を確認しよう⁽¹⁰⁾。

まずアッバース1世は、自らの治世当初の政治的混乱の中で失った領域の奪還を、これまで進めてきたことを述べる。ただしその一方で、以下の理由からカンダハールはその対象外であったとされる。

カンダハールはかの高位の一門〔ムガル朝〕に任命された者たちの占有下にあり、朕は彼らを自らの(任命された)者と考えていたため、(カンダハールに)手を出さなかった。朕は(ジャハーンギールと)一致し兄弟であると認識していたので、かのお方〔ジャハーンギール〕もまた、自身の天国を住処とする偉大な先

祖たち〔ムガル朝歴代君主〕の道に従って、上記に述べたような考慮をなさっていることを、朕は期待していた。

すなわちアッバース1世が失地回復の対象からカンダハールを除外していた理由は、自身の兄弟であるジャハーンギールの臣下が同地を支配していたからであった。さらに、アッバース1世はカンダハール攻撃前に、同地に駐屯するムガル朝軍に次のように伝えたと言われる。

神の影である高位の帝王様〔ジャハーンギール〕と朕たる吉兆な陛下〔アッバース1世〕の間は分かち難く、領地はお互いのものだと理解している。朕は旅路をかの方〔カンダハール〕へと向けており、無礼な態度をとらないようにせよ。

この記述のなかでアッバース1世は、自らの支配領域と兄弟であるジャハーンギールのそれが共有されていると表明した。そしてこの論理を用いて、自らがカンダハールに入城する権利があると主張したのである。

さらに本書簡の記述は、以下のように続く。すなわち同地を守備するムガル朝軍は、前述した言付けを受け取ったにも関わらず、両君主の関係性を理解せずにアッバース1世に対して反抗した。そのためサファヴィー朝軍はカンダハールを攻撃し、瞬く間に同地を占領した。ただしアッバース1世は、ジャハーンギールとの「兄弟たる道 (tarīq-i barādārī)」を考慮して、捕虜としたムガル朝軍の罪を赦免し、彼らをムガル朝へと送還した。

以上のアッバース1世の主張は、カンダハールの攻撃に至った説明として、事実関係が疑わしいだけでなく非常に複雑である⁽¹¹⁾。アッバース1世は、なぜわざわざこのような不自然な論理を用いたのであろうか。それを明らかにするためには、問題の根源であるカンダハールの帰属について、アッバース1世が展開した主張を整理する必要がある。上述の通り、両朝の支配領域は共有されており、加えてその現地統治者は、任命したムガル朝だけではなくサファヴィー朝の臣下であるとも見做された。この論理に基づくと、サファヴィー朝がムガル朝の領域に侵入し自らの臣下を現地統治者に任命

したとしても、単なる現地統治者の交代であり、前者が後者を攻撃したことにはならない。それでは、両朝の支配領域や臣下を互いのものと見做す根拠は何であったか。これは上に述べた通り、両朝の君主の間に一致した兄弟としての関係があったからに他ならない。すなわちアッバース1世は、ジャハーンギールと自らが兄弟と呼び合う関係であったことを利用して、自らのカンダハール攻撃と同地の占領を正当化しつつも、それらがムガル朝に対する敵対行為であることを否定したのである。

以上の書簡を受け取ったジャハーンギールは、カンダハール奪還に向けた軍隊を招集するとともに、アッバース1世に返信を送った(Jahāngīr Nāma, 402; Ma'āşir-i Jahāngīrī, 351)⁽¹²⁾。その書簡においては、アッバース1世によるカンダハール攻撃を以下のように批判している。

この情報〔アッバース1世がカンダハール征服に向かったという情報〕が(正確だと)確認された後、すぐに(カンダハール州総督である)アブドゥルアズィーズ・ハーンに次のように命令を下した。すなわち、「かの成功を収める兄弟〔アッバース1世〕の満足は邪魔しないように。今まで兄弟関係(barādārī)の土台は強固であり、この親密さと同じ志を持つことの程度と段階については世界に比するものがなく、どんな贈り物もそれと比べると値しない」と。したがって、(アッバース1世にとって)兄弟関係と(その)誠実さにふさわしい行動は、(ムガル朝の)使者が到着するまで、(攻撃を)思い留まることであった。おそらく、(アッバース1世からジャハーンギールに)届いた要求と主張は、成功裏に実現されたであろう。使者が到着する前にこのような疑わしい行為を犯すことについて、世の中の人々は約束と誠実さの飾りをいずれの側に飾り、寛大と男らしさをいずれの側に帰するであろうか(ジャハーンギールの方であろう)。

以上の主張をそのまま読み取ると、ジャハーンギールはアッバース1世がカンダハールを攻撃して占領したことそれ自体を批判しているわけではないことが分かる。むしろこの書簡の文面には、ジャ

ハーンギールが、兄弟であるアッバース1世にカンダハールを譲り渡すように命令したとさえ書かれている。その上でジャハーンギールは、ムガル朝の使者がカンダハールに到着するまで同地への攻撃を思いとどまることこそ、兄弟関係にふさわしい行動であったと非難しているのである。上述の通り、ジャハーンギールはカンダハール奪還に向けた遠征軍の編成を命じており⁽¹³⁾、同地をサファヴィー朝に明け渡す気がなかったのは明白である。それにも関わらず上記のような主張を展開した理由として、アッバース1世への一定の配慮が読み取れるであろう。すなわちジャハーンギールは、前述の往信の中でアッバース1世が唱えた両君主の兄弟関係を受け入れつつも、その行動が兄弟としての信義に反すると論じることで、サファヴィー朝によるカンダハール占領を非難したのである。

以上で論じたように、アッバース1世とジャハーンギールは、カンダハールの係争に関して、いずれも両者の兄弟関係に基づく論理を用いて自らの立場を正当化した。これによって両者は、同係争のように双方が対立する案件において、相手に友好的な姿勢を示しつつも、自らの主張を展開することが可能となった⁽¹⁴⁾。本章の冒頭で確認したように、17世紀前半には、アシュタルハーン朝の脅威に対応するため、サファヴィー朝とムガル朝の連携が必要であった。この状況下で、外交書簡におけるアッバース1世とジャハーンギールの兄弟関係への言及は、両朝の紛争が双方の関係全体に波及することを防ぐために、戦略的に行われていたと考えられる。

3. 両君主死後のカンダハールをめぐる係争と それに伴う外交書簡の交換

3-1. アリー・マルダーン・ハーンの亡命と

アッバース2世による親征

アッバース1世とジャハーンギールが死去した後も、両朝の君主は外交使節を頻繁に派遣しあって、友好関係を維持していた (Islam 1970, 97-123)。しかしながらその一方で、両朝をめぐる環境は少しずつ変化していた。第一にサファヴィー朝は、第6代君主サフィー1

世（在位1629年-1642年）のもとで、長年にわたる最大の脅威であったオスマン朝とズハーブ協定を締結し（1639年）、双方の支配領域をおおむね確定させた（守川 2007, 75-82; Matthee 2012, 118-121）。これによって同朝はオスマン朝と接する西方辺境の状況に憂慮することなく、カンダハールを含む東方辺境へ軍隊を進めることが可能となった。第二にムガル朝第5代君主シャー・ジャハーン（在位1628年-1658年）は、ティムール朝旧領の回復を目指して北方への進出を図った。この動きのなかでシャー・ジャハーンは、サファヴィー朝の側方からの攻撃という不測の事態を防ぐために、カンダハールへの関心を高めていった（Foltz 1998, 23, 133-136）⁽¹⁵⁾。第三に、両朝の共通の脅威であったアシュタルハーン朝は、1642年にイマーム・クリーが死去した後、王族の内紛により勢力を弱めた（Burton 1997, 212-264）。同朝の弱体化は、両朝が双方との連携を維持する意義が薄れることを意味した。以上の3点は、1630年代後半から1640年代にかけて、サファヴィー朝とムガル朝それぞれがカンダハールへの関心を高めたと同時に、双方との連携をあまり重視しなくなっていったことを示唆している。このように政治環境が変化するなか、両朝はカンダハールをめぐるどのような主張を展開したのであろうか。それを検証するため、本節ではアリー・マルダーン・ハーンの亡命（1638年）とアッバース2世による親征（1648年）に関する外交書簡を分析しよう。

サファヴィー朝下でカンダハール総督を務めていたアリー・マルダーン・ハーンは、中央に送付する税額をめぐる当時のサファヴィー朝君主サフィー1世と対立し、ムガル朝へと亡命した。それと同時にカンダハールにはムガル朝軍が進出し、その全域を占領した。これに対しサフィー1世は、同地の奪還を目指して、遠征軍を派遣する準備に取りかかった（*Khulāṣat al-Ṣiyar*, 253-256, 290-295; *‘Amal-i Ṣāliḥ*, 2: 202-204, 224-238; *Qiṣaṣ al-Khāqānī, Sādāt*: 241-258）。ところが1642年にサフィー1世が急死しこの遠征が中止になったこと、さらに1646年からムガル朝がアシュタルハーン朝支配下のバルフに遠征し、サファヴィー朝との関係を改善する必要性が増したことによって、

両朝の緊張状況に変化が生じる。その結果シャー・ジャハーンは1646年に、新君主アッバース2世の即位を祝う外交使節を送り、アリー・マルダーン・ハーンの亡命以降外交使節の往来が途絶えていた両朝関係の修復を図った (Islam 1970, 105–110)。この使節が持参した書簡において、シャー・ジャハーンはアッバース2世との関係を、「父子関係 (nisbat-i pidar-farzandī)」と述べた。そして次のように言明する⁽¹⁶⁾。

朕〔シャー・ジャハーン〕は、(サファヴィー朝との) 完全な愛情と一致 (kamāl-i vadād va ittihād) に鑑みて、かの版図とかの王朝に任命された者〔サファヴィー朝の版図と臣下〕を自らのものと見做していた。

その上でシャー・ジャハーンは、アリー・マルダーン・ハーンがサファヴィー朝下で不当な扱いを受けていたことに言及し、それによって以下の結果を招いたと述べる。

(アリー・マルダーン・ハーンは) この王権〔ムガル朝〕がかの国家〔サファヴィー朝〕と分かち難いという正しい思想に基づく真の信仰に反しないように、やむを得ず、世界の人々の避難所であり世の人々の拠り所であるこの宮廷〔ムガル朝宮廷〕に身を寄せた。

この記述において、アリー・マルダーン・ハーンの亡命は、ムガル朝とサファヴィー朝の分かち難い関係に基づいて行われたと主張される。この議論は、両朝の支配領域やその臣下が共有されていると主張する点において、前章で取り上げたアッバース1世がジャハーンギールに宛てた書簡の論理を踏襲している。そしてこの論理を用いることによって、シャー・ジャハーンは、自らの息子と見做すアッバース2世に対して、アリー・マルダーン・ハーンの亡命に関する正当性を主張したのである。

以上の書簡に対して、未だ自らの権力基盤が定まっていなかったアッバース2世は、不快な態度を表明することや反論を試みることはなかった (Jahānārā-yi ‘Abbāsī, 429–435)。しかしながらアッバース2世は、1645年に大宰相ミールザー・ムハンマド・タキーが暗殺されたこと

を機に政治の実権を掌握すると、カンダハールの奪取に向けた準備を始めた。そして1648年に自ら遠征軍を率いてカンダハールを攻撃し、同地を占領した（Luft 1968, 86–89, 133–139; Matthee 2012, 42–44, 121–125）。この直後にシャー・ジャハーンに送られた書簡には、アッバース2世がカンダハールを攻撃した経緯が説明されている。以下にその内容を確認しよう⁽¹⁷⁾。

かの一致した二心ない覚書〔直前に送ったアッバース2世の書簡〕において、カンダハールを所望することを伝えていた。前述の〔アッバース2世とシャー・ジャハーンとの〕関係に鑑みて、偉大なおじ（であるシャー・ジャハーン）の高邁な志が（アッバース2世の）希望の実現に向けて受諾という歩みを進めていることは、疑いなく確かである。従って（アッバース2世は）、勝利に結びついた鎧の側近たちと近習たちとともに、かの境界〔カンダハール〕に向けて出立した。（第一に、）幸福の旗（を持つサファヴィー朝軍）がこの地域〔カンダハール〕に入った後、かのいと高き国家に関係する者たち〔ムガル朝軍〕は、盤石なこれら2国家の連合という天国への旅を、覚束なくした。（彼らは）あたかもよそ者と接しているように、服従という諸扉に立ち塞がった〔アッバース2世に服従しなかった〕。そして墮落した考えによって、この誠実を求め真実を思索する者〔アッバース2世〕とかの高貴な生まれのおじ〔シャー・ジャハーン〕の間を分かつことを、不服従という諸々のベールの下に隠し持った。（第二に、）この真の愛情を持つ気心の知れた者〔アッバース2世〕とかの一団〔ムガル朝軍〕との対立は、かの威厳あるいと高き地位の方〔シャー・ジャハーン〕の命令に反していた。（以上2つの理由により、シャー・ジャハーンの）志に対する責務によって（アッバース2世に）必要となったことには、勝利と結びついた（サファヴィー朝の）軍隊を、（両君主の関係への）打撃を熱望しているかの一団〔ムガル朝軍〕の懲罰に、充てることであった。

この書簡でアッバース2世は、カンダハールの自らへの譲渡を求めた以前の書簡に言及しつつ⁽¹⁸⁾、おじであるシャー・ジャハーンは

その要求を当然聞き入れるはずだと述べる。以上を前提として、その要求の実現を阻むカンダハールのムガル朝軍を、両朝の連合を望むシャー・ジャハーンの反逆者であり懲罰の対象だと断定した。この議論は、前章で取り上げたアッバース1世がジャハーンギールに宛てた書簡のそれを概ね踏襲している⁽¹⁹⁾。

以上の議論から、両朝の君主は、アッバース1世とジャハーンギールの死後も、両君主の書簡に用いられた議論を踏襲して、カンダハールの自らへの帰属を主張していたことが分かる。そしてそれらの議論は、両君主の擬制的な親族関係を土台としていた。本節の冒頭に述べたように、1630年代から40年代までは、カンダハールをめぐる両朝の緊張が徐々に高まりつつあった時代であった。このように政治環境が変化するなかでも両朝君主は、相手を自らの親族に喩えることで、互いへの友好的な姿勢を示し続けていたと言えるであろう。

3-2. アッバース2世とアウラングゼーブによる書簡交換

前節で取り上げたアッバース2世のカンダハール占領(1648年)は、同地の奪還を目指すシャー・ジャハーンの3度にわたる遠征をもたらし(1649年, 1651年, 1653年)、両朝間で最大規模の衝突へと発展した(Bayānī 2005-6, 439-457; Richards 1993: 133-135)。この衝突による影響は大きく、その後10年近くにわたって両朝間で正式な外交使節の往来が途絶した。この状況を打開すべく、アッバース2世はアウラングゼーブ(在位1658年-1707年)の即位という機会を捉えて、それに祝意を表するという名目で1659-60年に使節を派遣した(Jahānārā-yi ‘Abbāsī, 705-709; ‘Ālamgīr Nāma, 607-609)。この使節が持参した書簡では、新君主の即位を祝う書簡にもかかわらず、文面全体の約3分の1がカンダハール問題に割かれており、この問題に対するアッバース2世の関心の強さが窺える。さらに注目される点は、以下の文面から確認できるように、これまでと異なる論理を用いてサファヴィー朝によるカンダハール支配の正当性が論じられていることである⁽²⁰⁾。

天国を住处とする亡きお方〔タフマースプ1世〕からかの陛下〔フマーユーン〕に対して表された同情と好意の返礼として、

「安寧の館」カンダハールを前述の^{おくりな}諡のお方 (navvāb-i sābiq al-alqāb) [タフマースプ1世] に用立てて、この至高な一門〔サファヴィー朝〕の血族たちに占領させた。かの邦〔カンダハール〕は、まさに両者の和合の証であり双方の友好の証であったが、その場所は天国を住処とする亡きお方〔タフマースプ1世〕の死去まで、かの永遠に続く国家〔サファヴィー朝〕の臣下たちによる占領下に定まっていた。

この引用部分では、第1章で述べたフマーユーンのサファヴィー朝への亡命が言及されている。この記述をそのまま史実として受け取ることはできないものの⁽²¹⁾、アッバース2世が歴史的経緯に言及しつつ自らのカンダハール支配を正当化したことは注目に値する。なぜならばこの論理は、両朝の間で交わされたそれ以前の書簡には確認できないからである。その一方で、本書簡にはこれまでの外交書簡で用いられてきた、両朝君主の擬制的な親族関係を用いてカンダハールの支配を正当化する主張が確認できない。それどころかこの書簡には、両朝君主を親族に喩える表現が、一切用いられていないのである。

このようなアッバース2世の書簡に対して、アウラングゼーブは1663年に返信を送った⁽²²⁾。この書簡において、アウラングゼーブはアッバース1世とジャハーンギールの関係について、以下のように振り返っている⁽²³⁾。

(アッバース1世とジャハーンギールは) 高位であるかの吉兆な一族の祖先たち〔ムガル朝の歴代君主〕とかの高貴な一門〔サファヴィー朝の歴代君主〕の間でずっと以前から踏みならされ進んできた道を、常に歩み先に進んだ。(それは) 兄弟たる道において、絶えず真の兄弟たること〔兄弟愛〕というまっすぐな道を共に歩むことが習慣になるほどまで、(両君主の) 友好の道をも踏みならすように定められ、お互いに文通と贈り物を送るという門が開かれていた。

本書簡によると、サファヴィー朝とムガル朝の君主の関係は、両君主が死去した後も変わらなかったとされる。しかしながらカンダ

ハールをめぐる係争は、その関係に以下のような影響を与えた。

カンダハールの事件、その事件はふとしたきっかけで見えない隠れたところから明るみに出て、運命と宿命によって起こったことであり、真実を知る者たちの洞察力のもとでは全く考慮するに値しないことなのだが、(サフィー1世は)その事件のことの結末を、永遠の愛情と絶えることのない友情を毀損する原因とみなし、かの〔ムガル朝君主との友好の〕道を(歩むことを)止めた。

ところがアッバース2世がムガル朝に使節を派遣したことで、アウラングゼーブとの関係は、次のように一新されたとされる。

(両君主は)親密な関係への希求と、友情にとって必要な諸々の気遣いという昔からの記憶から、外面では近親としての関係(rābīta-yi qarābat), 内面では誠実な愛情を強めるべく尽力し、古からの兄弟の絆(‘aqd-i muvākhāt)を新たにした。

以上のようにアウラングゼーブは、カンダハールをめぐる係争に関して、アッバース2世の主張に正面から反駁せず、些細な事件として受け流した。これらの記述において両朝君主を親族に喩える表現は、これまでの書簡のように、カンダハールに対する自らの主張を裏付ける論拠としては用いられていない。しかしながら一方でこの表現は、両朝の関係改善を訴えるために、依然として利用されていた。

このやり取りを最後に、両朝間における外交使節の往来は再び途絶えてしまう⁽²⁴⁾。この状況が打開されたのは、ミール・ヴァイスが反乱を起こしてカンダハールを占領した1709年であった(Islam 1970, 130-131, 137-138; Lockhart 1958, 80-170)。この年、サファヴィー朝の実質的な最後の君主であるスルターン・フサイン(在位1694年-1722年)は、ムガル朝との関係を回復しミール・ヴァイスに対抗するべく、同朝の第7代君主バハードゥルシャー1世(在位1707年-1712年)に外交使節を送った(Tazkirat al-Salāṭīn-i Chaghtā, 185, 200-201, 220)。この使節が持参した書簡において、スルターン・フサインとバハードゥルシャー1世の間には、「父子としての関係(ravābiṭ-i ubuvvat va

bunuvvat)」があると述べられている⁽²⁵⁾。サファヴィー朝とムガル朝は、17世紀後半以降に関係が冷えこんだ後も、双方の関係改善を訴えるために、両朝君主の擬制的な親族関係を利用し続けたと言える。

おわりに

本稿では、17世紀のサファヴィー朝とムガル朝との外交書簡において、両朝の君主を親族に喩える表現がどのように用いられてきたか、カンダハールをめぐる係争に着目して考察した。明らかとなったことは以下の3点である。第一に、アッバース1世とジャハーンギールは、カンダハールでの軍事衝突という危機に際して、双方の擬制的な親族関係を踏まえて自らの主張を展開することで、両朝の外交関係の破綻を防いだ。第二に、両君主の死後も両朝の君主は、カンダハールをめぐる係争に際して、上述の関係に基づいた主張を展開することで、互いへの友好的な姿勢を示し続けた。第三に、このような両朝君主の関係は、17世紀後半以降両朝関係が冷えこんでいく中でも、双方の関係改善を訴えるために、外交書簡に言及され続けた。

このようにサファヴィー朝とムガル朝は、外交書簡において互いを親族に喩えることで、相手との友好的な関係を維持しようとした。しかしそれだけではなく両朝は、この擬制的な親族関係を論拠として自らの行動を正当化し、さらに相手に自らの主張に沿った行動をとるように要求していた。本稿で述べたように、サファヴィー朝とムガル朝にとって17世紀は、両朝の連携を維持する必要性が薄れていくと同時に、カンダハールをめぐる双方の対立が徐々に表面化していった時代であった。このなかで両朝君主の擬制的な親族関係は、全面的な衝突を避けながらも自らの利益確保を正当化しようとする両朝の思惑のもと、外交上の大義名分として用いられ続けたと言える。

参考文献

一次史料：未刊行史料

- Bahār-i Sukhan: Kanbū, Muḥammad Šāliḥ. *Bahār-i Sukhan*. Ms. British Library, Or. 178.
- Fayyāz al-Qavānīn: ‘Ibād al-Allāh al-Fayyāz. *Fayyāz al-Qavānīn*. Ms. British Library, I.O. 3901.
- Nuskha-yi Jāmi‘a: Īvāghlī, Abū al-Qāshim Ḥaydar Bayg. *Nuskha-yi Jāmi‘a-yi Murāsālāt*. Ms. British Library, Or. 3482.
- Qīṣaṣ al-Khāqānī: Shāmīlū, Valī Qulī ibn Dāvūd Qulī. *Qīṣaṣ al-Khāqānī*. Ms. Bibliothèque nationale de France, Supplément Persan 227.
- Ṭāhir Vaḥīd: Vaḥīd Qazvīnī, Muḥammad Ṭāhir. *Inshā‘-yi Ṭāhir Vaḥīd*. Ms. Kitābkhāna-yi Majlis-i Shūrā-yi Islāmī-yi Īrān, 2260.

一次史料：刊行史料

- Afzal al-Tavārīkh: Faḏlī Khūzānī al-Iṣfahānī. 2015. *A Chronicle of the Reign of Shah ‘Abbas*, 2 vols. Edited by Kioumars Ghereghlou and Charles Melville. Cambridge: Gibb Memorial Trust.
- ‘Ālamgīr Nāma: Muḥammad Kāzīm ibn Muḥammad Amīn. 1868. *The Ālamgīr Nāmah*. Edited by Mawlawī Khādīm Ḥusayn and Mawlawī Abd al-Ḥayy. Calcutta: Asiatic Society of Bengal.
- ‘Amal-i Šāliḥ: Kanbū, Muḥammad Šāliḥ. 1967. *‘Amal-i Šāliḥ: Shāh Jahān Nāma*. Edited by Ghulām Yazdānī and Vaḥīd Qurayshī, 3 vols. Lāhūr: Majlis-i Taraqqī-yi Adab.
- Bādshāh Lāhūrī: Lāhūrī, ‘Abd al-Hamīd. 1867. *The Badshah Namah*, 2 vols. Edited by Mawlawis Kābīr al-Din Ahmad and Abd al-Rahīm. Calcutta: College Press.
- Chardin: Chardin, Jean. 1735. *Voyages du chevalier Chardin: En Perse, et autres lieux de l’Orient*, 4 tomes. Amsterdam: Aux depens de la Compagnie.
- Iḥyā’ al-Mulūk: Sīstānī, Malik Shāh Ḥusayn. 1966. *Iḥyā’ al-Mulūk*. Edited by Manūchīhr Sutūda. Tīhrān: Bungāh-i Tarjuma va Nashr-i Kitāb.
- Jahānārā-yi ‘Abbāsī: Vaḥīd Qazvīnī, Muḥammad Ṭāhir. 2005. *Tārīkh-i Jahānārā-yi*

- ‘*Abbāsī*. Edited by Sa‘īd Mīr Muḥammad Šādiq. Tih-rān: Pāzhūhishgāh-i ‘Ulūm-i Insānī va Muṭāli‘āt-i Farhangī.
- Jahāngīr Nāma: Jahāngīr, Nūr al-Dīn Salīm. 1980–81. *Jahāngīr Nāma: Tūzak-i Jahāngīrī*. Edited by Muḥammad Hāshim. Tih-rān: Intishārāt-i Bunyād-i Farhang-i Īrān.
- Khulāṣat al-Šiyar: Iṣfahānī, Muḥammad Ma‘šūm ibn Khvājagī. 1989–90. *Khulāṣat al-Šiyar: Tārīkh-i Rūzgār-i Shāh Šaftī-yi Šafavī*. Tih-rān: Intishārāt-i ‘Ilmī.
- Ma’āšir-i Jahāngīrī: Ḥusaynī, Khvāja Kāmkār. 1978. *Ma’āšir-i Jahāngīrī*. Edited by ‘Aẓrā Alavī. New York: Asia Publishing House.
- Ma’āšir al-Umarā’: Shāh Navāz Khān, ‘Abd al-Razzāq Šamšām al-Dawla. 1888–1891. *Ma’āšir al-Umarā’*, 3 vols. Edited by ‘Abd al-Raḥīm Mawlavī and Mīrzā Ashraf ‘Alī Mawlavī. Calcutta: Calcutta Madrasah.
- Manucci: Manucci, Niccolao. 1715. *Histoire generale de l’empire du Mogol: Depuis sa foundation*, 4 vols. Traduit par François Catrou. La Haye: Chez Guillaume de Voys.
- Qīṣaṣ al-Khāqānī, Sādāt: Shāmlū, Valī Qulī ibn Dāvūd Qulī. 1992–93. *Qīṣaṣ al-Khāqānī*, 2 vols. Edited by Ḥasan Sādāt Nāširī. Tih-rān: Sāzmān-i Chāp va Intishārāt-i Vizārat-i Farhang va Irshād-i Islāmī.
- Tazkīrat al-Salāṭīn-i Chaghtā: Kāmvar Khān, Muḥammad Hādī. 1980. *Tazkīrat al-Salāṭīn-i Chaghtā: Tazkīra-yi Jānīshinān-i Aurangzīb*. Edited by Muẓaffar ‘Ālam. Bamba‘ī: Eshiyā Publishing Hā‘ūs.

二次文献

- Aman Ur Rahman. 1988. “Humayun: Vassalage Coinage.” *Oriental Numismatic Society News Letter* 114, 7–8.
- Barzegar, Karim Najafi. 2000. *Mughal-Iranian Relations: During Sixteenth Century*. Delhi: Indian Bibliographies Bureau.
- Bayānī, Khān-bābā. 2005–6. *Tārīkh-i Nīzāmī-yi Īrān: Janghā-yi Dawra-yi Šafavīya*. Tih-rān: Intishārāt-i Murshid.
- Burton, Audrey. 1997. *The Bukharans: A Dynastic, Diplomatic and Commercial History, 1550–1702*. Richmond: Curzon.

- Faruqi, Munis. 2012. *The Princes of the Mughal Empire, 1504–1719*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fekete, Lajos. 1977. *Einführung in die persische Paläographie: 101 persische Dokumente*. Budapest: Akadémiai Kiadó.
- Foltz, Richard. 1998. *Mughal India and Central Asia*. Karachi: Oxford University Press.
- Habib, Irfan. 1982. *An Atlas of the Mughal Empire: Political and Economic Maps with Detailed Notes, Bibliography and Index*. Aligarh: Centre of Advanced Study in History, Aligarh Muslim University.
- Haidar, Mansura. 2002. *Central Asia in the Sixteenth Century*. New Delhi: Manohar Publishers and Distributors.
- Islam, Riazul. 1970. *Indo-Persian Relations: A Study of the Political and Diplomatic Relations between the Mughul Empire and Iran*. Tehran: Iranian Culture Foundation.
- 1979–1982. *A Calendar of Documents on Indo-Persian Relations (1500–1750)*, 2 vols. Tehran: Iranian Culture Foundation.
- Lal, Sajun. 1973. “The Mughals in the Deccan (1687–1724).” In *History of Medieval Deccan (1295–1724)*, edited by Haroon Khan Sherwani and Purushottam Mahadev Joshi, vol. 1, 601–627. Hyderabad: The Government of Andhra Pradesh.
- Lockhart, Laurence. 1958. *The Fall of the Safavī Dynasty and the Afghan Occupation of Persia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lowick, Nicholas. 1982. “Joint Coinage of Humayun and Shah Tahmasp at Qandahar.” *Numismatic Digest* 6, 74–78.
- Luft, Paul. 1968. “Iran unter Schah 'Abbās II: 1642–1666.” PhD diss., Universität Göttingen.
- Mathee, Rudi. 1996. “Unwalled Cities and Restless Nomads: Firearms and Artillery in Safavid Iran.” In *Safavid Persia*, edited by Charles Melville, 389–416. London: I.B. Tauris.
- 2012. *Persia in Crisis: Safavid Decline and the Fall of Isfahan*. London: I.B. Tauris.

- Mitchell, Colin. 1997. "Safavid Imperial Tarassul and the Persian Insha Tradition." *Studia Iranica* 26, 173–209.
- . 2009. *The Practice of Politics in Safavid Iran: Power, Religion and Rhetoric*. London: Tauris Academic Studies.
- Mohibbul Hasan. 1985. *Babur: Founder of the Mughal Empire in India*. New Delhi: Manohar.
- Mohiuddin, Momin. 1971. *The Chancellery and Persian Epistolography under the Mughals: From Bābur to Shāh Jahān, 1526–1658*. Calcutta: Iran Society.
- Moin, Azfal. 2012. *The Millennial Sovereign: Sacred Lingship and Sainthood in Islam*. New York: Colombia University Press.
- Newman, Andrew. 2006. *Safavid Iran: Rebirth of A Persian Empire*. New York: I.B. Tauris.
- Quinn, Sholeh. 2015. *Shah Abbas: The King Who Refashioned Iran*. London: Oneworld Publication.
- Ray, Sukumar. 1948. *Humāyūn in Persia*. Calcutta: Royal Asiatic Society of Bengal.
- Richards, John. 1993. *The Mughal Empire*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Streusand, Douglas. 1989. *The Formation of the Mughal Empire*. Delhi: Oxford University Press.
- Verma, Som Prakash. 2009. *Interpreting Mughal Painting: Essays on Art, Society, and Culture*. New Delhi: Oxford University Press.
- 後藤裕加子 2004「サファヴィー朝ムハンマド・フダーバンダ時代の宮廷と儀礼」『西南アジア研究』第61号, 20–46頁。
- 近藤信彰 2000「イラン, トゥラン, ヒンド: ペルシア語文化圏の発展と変容」『イスラーム・環インド洋世界: 16–18世紀』羽田正, 樺山紘一編, 岩波書店, 93–114頁。
- 羽田正 1995「西アジア・インドのムスリム国家体系」『近代世界への道: 変容と摩擦』歴史学研究会編, 東京大学出版会, 75–109頁。
- . 2008「サファヴィー朝の時代」永田雄三, 羽田正『成熟のイスラーム世界 (世界の歴史15)』中央公論新社, 277–465頁 (原著: 1998年, 中央公論社, 241–410頁)。

守川知子 2007「近代西アジアにおける国境の成立：イラン＝オスマン国境を中心に」『史林』第90巻第1号，62–91頁。

註

- (1) 両朝の関係が友好的であった理由として、イスラムは、ペルシア語文化を共有しムガル朝宮廷でサファヴィー朝領内出身者を積極的に登用していたこと、両朝の共通の脅威として中央アジアのシャイバーン朝（1428年–1599年）やアシュタルハーン朝（1599年–1785年）が存在したこと、隣接する国家として両朝がお互いの強大さと重要性を認識していたことを指摘している（Islam 1970, xxi–xxii, 174–181）。また羽田は、イスラムの研究を引用しつつ、両朝関係の性質を、両君主が対等かつ友好的な関係を結んでいた点で、前近代の国家において稀有なものであったと論じた（羽田1995, 75–78）。さらに16世紀の両朝関係をイルハン朝崩壊以後の歴史的経緯に遡って論じたバルゼギャルは、両朝の人的交流やその結果として生まれた双方の文化的結びつきの強さと、それに基づく友好関係を指摘している（Barzegar 2000, esp. 267–272）。
- (2) 書簡に関しては、両朝の主要な書簡集や年代記を網羅的に調査したイスラムの目録（Islam 1979–1982）を参照した。本稿では外交書簡を参照する際、その出典に加えてこの書簡目録の番号（以下「番号」と略記）を付す。サファヴィー朝とムガル朝の諸史料には、両君主の間で交わされた書簡だけでなく、一方の王朝の君主から他方の王朝の地方統治者に宛てた書簡や、両朝の地方統治者同士で交換された書簡も残されている。さらに、年代記や書簡集に残る公式な書簡の他にも、両朝の間で秘密裏に交わされた書簡が存在した可能性は高い。しかしながら本稿においては、書簡から両朝の公的な見解を読み取ることが目的であるため、原則的に公式の外交使節が持参した両君主間の書簡に絞って分析した。なお、ペルシア語書簡の構成・作法についてはフェケテの著作を参照（Fekete 1977, 43–57）。サファヴィー朝の書簡術と書簡作品についてはミッチェルの研究を（Mitchell 1997; 2009）、ムガル朝の書簡術についてはモヒーウッディーンとイスラムの文献を参照（Mohiuddin 1971; Islam 1979–1982, 1: 1–45）。
- (3) タフマースプ1世の大宰相カーズィー・ジャハーンからフマーユーンに

宛てたとされる書簡には、後者が自らの臣下を通じてサファヴィー朝への忠誠 (ikhlaṣ-i dawlat-khāhi) を表明したと記されている。この書簡は君主間で交わされたものではないものの、外交上のやり取りにおいてもサファヴィー朝君主がムガル朝君主を劣位に置いていたことを示す証拠に挙げられよう。本書簡の番号はH. 11。その文面はアッバース2世治世 (1642年–1666年) に編纂されたサファヴィー朝の書簡集『書簡総合典範 (Nuskha-yi Jāmi‘a-yi Murāsālāt)』 (Nuskha-yi Jāmi‘a: 127r–127v) を参照した。

- (4) タフマースプ1世死後、第3代君主イスマーイール2世 (在位1576年–1577年) や第4代君主ムハンマド・フダーバンダ (在位1578年–1587年) と、アクバルとのやりとりに関しては、史料の記述が少なく詳細は不明である (Islam 1970, 50–51)。
- (5) 番号はJ. 47。本書簡の文面は、サファヴィー朝の書簡集『書簡総合典範』 (Nuskha-yi Jāmi‘a: 223r–224v) を参照した。ところで、アッバース1世とジャハーンギールが互いを兄弟と呼び始めた経緯は、年代記やその他の史料に記載がなく不明である。しかしながら本書簡によって、その習慣はジャハーンギールが即位する前から始まっていたことが分かる。
- (6) このような両朝君主の関係について、羽田は対等かつ友好的であったと論じた。註(1)を参照。
- (7) 本稿013–014頁で言及するアッバース2世からアウラングゼーブに宛てた書簡のように、両朝の君主が、全ての外交書簡で、両朝君主を親族に喩える表現を用いているわけではない。カンダハールをめぐる係争以外に、これらの表現をどのような場合にいかにして用いたか考察するためには、17世紀以降に両朝君主の間で交わされた外交書簡の網羅的かつ個々の事例に応じた分析が必要である。この問題に関しては、別稿に譲りたい。
- (8) また、番号Sh. 140とSh. 152の書簡で見られるように、両朝君主の互いに対する呼びかけが系譜の上で食い違うことがある。さらに番号Sh. 144とSh. 152の書簡で見られるように、発信者と送信者が同一にも関わらず、書簡によって相手に対する呼びかけが異なる事例も確認できる。但し少なくとも、本稿で取り上げるカンダハールをめぐる係争に関して、これらの系譜上の食い違いや相手との関係性の変化が、外交書簡で展開される論理に明確な影響を与えている事例は確認できなかった。

- (9) 註(1)を参照。
- (10) 番号はJ. 90。本書簡の文面は、アッバース1世治世を中心に記されたサファヴィー朝年代記『歴史の精華』(Afzal al-Tavārīkh) 第3巻 (Afzal al-Tavārīkh, 821-822) を元に、同朝の書簡集『書簡総合典範』(Nuskha-yi Jāmi‘a: 238v-239r) と、ジャハーンギール治世について記されたムガル朝の年代記『ジャハーンギール・ナーマ』(Jahāngīr Nāma) (Jahāngīr Nāma, 397-399) を参照した。
- (11) 例えば本書簡によると、サファヴィー朝軍は攻城用の装備を持たず (bī yarāq-i qal‘agīrī), カンダハールに出発したとされているが、実際には重量25マン (およそ75kg) の砲弾を打つ大口径砲を携えていた (Afzal al-Tavārīkh, 816)。近藤は、本書簡やそれに対するジャハーンギールの返信について、それぞれの内容が事実であるとは考えられないと述べた上で、両朝がペルシア語による高度な文芸技術を共有していたことを指摘している (近藤2000, 95-98)。
- (12) 番号はJ.91。本書簡の文面は、ムガル朝の年代記『ジャハーンギール・ナーマ』(Jahāngīr Nāma, 399-401) を元に、サファヴィー朝の年代記『歴史の精華』(Afzal al-Tavārīkh, 835-837) 第3巻と、同朝の書簡集『書簡総合典範』(Nuskha-yi Jāmi‘a: 239r-240r) を参照した。
- (13) カンダハールへ遠征軍を派遣する計画は、直後に起こったフッラム王子 (後のシャー・ジャハーン) の反乱により、立ち消えとなった (Faruqui 2012, 208-221)。
- (14) アッバース1世がカンダハールを占領した後も両君主は、互いへの外交使節の派遣を続けた (Islam 1970, 85-86)。
- (15) カンダハールは、中央アジア進出の前線基地となるカーブルやムルターンと交通路で結ばれており (Habib 1982, 2A-B), カンダハールからこれら2都市に遠征を行うことは容易である。もしこれら2都市のうち、いずれかでもサファヴィー朝の攻撃を受けると、中央アジアに向かっているムガル朝遠征軍は、たちまち退路が遮断される危険性があった。
- (16) 番号はSh. 140。本書簡の文面は、シャー・ジャハーン治世について記されたムガル朝の年代記『バードシャー・ナーマ』(Bādshāh Nāma) (Bādshāh Lāhūrī, 493-500) を元に、同朝の書簡集『大法規集』(Fayyāz al-Qavānīn)

(*Fayyāz al-Qavānīn*, 33v–36v) を参照した。

17
世
紀
以
降
の
サ
フ
ア
ヴ
ィ
ー
朝
・
ム
ガ
ル
朝
関
係
に
お
け
る
両
君
主
の
擬
制
的
な
親
族
関
係

徳
永

(17) 番号はSh. 152。本書簡の文面は、起草者の著作で校訂出版された『世界を彩るアッバースの歴史 (*Tārīkh-i Jahānārā-yi ‘Abbāsī*)』(Jahānārā-yi ‘Abbāsī, 492–495) の記述を元に、同著者の書簡集『ターヒル・ヴァヒード書簡集 (*Inshā’-yi Tāhir Vaḥīd*)』(Tāhir Vaḥīd, 16r–18r) と、アッバース 2 世治世を中心に記されたサファヴィー朝の年代記『帝王記 (*Qiṣaṣ al-Khāqānī*)』(Qiṣaṣ al-Khāqānī, Sādāt: 418–421) を参照した。

(18) 1648年のカンダハール攻撃開始前に、アッバース 2 世からシャー・ジャハーンに送られた書簡を指す。本書簡の番号はSh. 144。このなかでアッバース 2 世は、シャー・ジャハーンとの「父子関係 (ravābiṭ-i pidar-farzandī)」に鑑みて、カンダハールを息子である自らに譲渡するように要求した (Jahānārā-yi ‘Abbāsī, 450–455; Tāhir Vaḥīd, 13r–16r; Qiṣaṣ al-Khāqānī, Sādāt: 313–319)。

(19) 一方で、これら 2 つの書簡は、カンダハールの帰属に関して以下のような主張の違いがある。すなわち、アッバース 1 世の書簡において、カンダハールは両朝が共有する領域に含まれ、その帰属は問題となっていない。しかしながらアッバース 2 世の書簡においては、カンダハールのサファヴィー朝への帰属変更が問題となっている。すなわち、アッバース 2 世はアッバース 1 世に比べ、カンダハールの自らへの帰属を、より明確に主張したと言える。以上の書簡を携えたアッバース 2 世の使節は、シャー・ジャハーンとの謁見を拒否され、すぐに追い返された (*‘Amal-i Šālih*, 3: 77)。このような対応を取ることで、ムガル朝はサファヴィー朝に対して強い不満を表明したと考えられる。

(20) 番号はAb. 238。本書簡の文面は、起草者の著作である『世界を彩るアッバースの歴史』(Jahānārā-yi ‘Abbāsī, 710–715) を元に、同著者の書簡集『ターヒル・ヴァヒード書簡集』(Tāhir Vaḥīd, 34r–38v) と、サファヴィー朝の年代記『帝王記』(Qiṣaṣ al-Khāqānī, 249v–250v) を参照した。これらの記述を比較すると、『帝王記』に引用された文面は、他と異なり後半部の表現が大幅に簡略化されている。そのため、起草者のターヒル・ヴァヒードが著した前述の 2 著作の文面を中心に用いる。

(21) 例えば本稿02–03頁で述べた通り、フマーユーンはカンダハール占領後

四
七
一

ほどなくその支配権を奪取しており、タフマースプ1世死後までサファヴィー朝が一貫して同地を支配していた史実はない。

- (22) このように返礼の外交使節の派遣が遅れた原因は、アウラングゼーブの病気とカシミールへの行幸であったとされている (Islam 1970, 126–127)。
- (23) 番号はAb. 241。本書簡の文面は、起草者の書簡集『言葉の春 (*Bahār-i Sukhan*)』 (Bahār-i Sukhan, 13r–24v) を参照した。
- (24) 両朝が決裂した直接の原因は、アッバース2世がアウラングゼーブの書簡を携えたムガル朝の使節に、侮辱的な言葉を浴びせたことである (‘Ālamgīr Nāma, 974–975)。しかしながらアッバース2世がこのような言動をとった理由については、様々な説があり結論を出すのは難しい。ムガル朝の人名録『アミールたちの記録 (*Ma’āṣir al-Umarā’*)』では、ムガル朝の使者タルビヤト・ハーンの礼節をわきまえない振る舞いととも、アッバース2世の高慢な性格と精神錯乱が原因だと記されている (*Ma’āṣir al-Umarā’*, 1: 495–496)。マヌッチはアッバース2世の神経衰弱と、自らの送った使節が帰還する際に受けた仕打ちへの報復を理由に挙げている (Manucci, 2: 54, 130–131)。一方シャルダン、ムガル朝がカンダハールの奪還に向け遠征軍を組織しているのではないかという恐怖が、アッバース2世の態度の変化に影響を与えたと記している (Chardin, 3: 378–379)。この事件の後、アウラングゼーブはカンダハールの再奪還に大きな関心を寄せることはなかった。アウラングゼーブは1649年の遠征と1652年の遠征にて総司令官を務めており、カンダハールを奪取することの困難さを重々承知していたと思われる。さらに同じ時期、ムガル朝領内への攻撃を活発化させたマラーター勢力に対応するため、大規模な軍隊を南方のデカン高原に送らざるを得なくなった (Richards 1993, 205–252; Lal 1973, 603–309)。このような状況において、カンダハールの奪還は、ムガル朝にとって優先度が低い政策となった。一方サファヴィー朝にとっても、カンダハール占領という当初の目標を達成した後、数量に勝るムガル朝軍を圧倒してさらに領域拡大を図ることは、企図されておらずそもそも不可能であった。この状況のもとで、サファヴィー朝は、カンダハールを拠点として辺境防衛に徹した (Matthee 1996, 398–401; Matthee 2012, 125–129)。
- (25) 番号はPost-Ab. 260。本書簡の文面は、ムガル朝の書簡集『大法規集』

(Fayyāz al-Qavānīn, 242r-247r) を参照した。

(東京大学大学院 総合文化研究科 地域文化研究専攻 博士課程)

表. カンダハールの係争をめぐるアッバース1世とジャハーンギール治世以降の外交書簡と、それらの書簡における両朝君主の擬制的な親族関係への言及

番号	発送年	君主名：発信元（王朝）—送信先（王朝）	親族関係への言及（前者から後者へ）	本稿における言及箇所(頁)
J. 90	1622	アッバース1世 (S) — ジャハーンギール (M)	兄弟 (barādar)	06-08
J. 91	1622	ジャハーンギール—アッバース1世	兄弟 (barādar)	08-09
Sh. 140	1646	シャヤール・ジャハーン (M) — アッバース2世 (S)	息子 (farzand) / 父子関係 (ravābit-i pidar-farzandī)	010-011
Sh. 144	1648	アッバース2世—シャヤール・ジャハーン	父子関係 (ravābit-i pidar-farzandī)	024 (註18)
Sh. 152	1648	アッバース2世—シャヤール・ジャハーン	おじ ('amm)	012-013
Ab. 238	1659-60	アッバース2世 (S) — アウラングゼーブ (M)	なし	013-014
Ab. 241	1663	アウラングゼーブ—アッバース2世	兄弟の絆 ('aqd-i muvākhāt)	014-015

書簡の出典は、本文で引用されている箇所の各註を参照。また王朝名は、サファヴィー朝をS、ムガル朝をMと略記する。

Next, the author investigates the attitude of the Mughal government towards maritime navigation conducted by its subjects, by focusing on its demands made to the VOC. The government intended to provide a convoy for the ships of Mughal subjects on the sea, to search for and capture pirates, as well as either to return the cargoes plundered by those pirates or else to compensate for any losses, with the help of the VOC. This was similar to the security which the Mughal government guaranteed travellers by land within its territory. The government intended to secure maritime navigation to the same extent that it did land transportation.

Finally, the author analyses the VOC's perception of the Mughal government's response and the VOC's counter-response. The government not only adopted harsh measures toward the VOC, but also adopted an attitude of compromise at times, taking into consideration the impact of its measures on customs revenue at Surat and the annual dispatch of pilgrim ships to Mecca. As the VOC recognised such intention on the part of the Mughal government, it continued to negotiate with the government so that it could resume its trading activities there, while taking such retaliatory measures as capturing merchant ships and blockading the port of Surat at times.

The Fictive Kinship of the Safavids and the Mughals in Diplomatic Relations
since the Seventeenth Century: Diplomatic Correspondence
on the Qandahar Dispute

TOKUNAGA Yoshiaki

Scholars believe that Safavid Iran (1501–1722) and Mughal India (1526–1858) emphasized their friendly relations with each other and peace was established for many years. It is typical of their good relationship that their monarchs referred to each other in diplomatic correspondence as family members since the seventeenth century. However, detailed analyses of this diplomatic practice have not been conducted. Why did these two empires continue this practice over several generations? To investigate this practice, this study analyzed the usages of terms and expressions indicative of their fictive kinship between the Safavids and the Mughals in their diplomatic cor-

respondence of the seventeenth century. The study particularly focused on correspondence about the Qandahar dispute, which was the biggest disagreement between these two empires.

This study revealed the following three points. Firstly, Abbas I (r. 1587–1629) and Jahangir (r. 1605–1627), who experienced a military confrontation regarding Qandahar in 1622, justified their operations using the discourse of kinship, thereby preventing a total breakdown of diplomatic relations between the two empires. Secondly, when confronted by the Qandahar dispute, the heirs of these two monarchs followed this diplomatic practice in an attempt to lessen the negative influence of the Qandahar problem on their relations. Thirdly, their fictive kinship was referred to in their correspondence with the intention of fixing the relationship, while diplomatic relations generally deteriorated in the second half of the century.

In sum, to maintain friendly relations between Safavid Iran and Mughal India, the countries' monarchs used terms of fictive kinship in their diplomatic correspondence. In addition, they each used that kinship discourse to request the other to accede to their political and diplomatic demands and to explain their military actions. In conclusion, the usages of terms of fictive kinship between these two imperial houses in their diplomatic correspondence over several generations reflect their diplomatic policies used to justified pursuit of their greatest interests while preventing full-scale confrontations.